

## 解 題

柴田常恵は、明治の終わりごろから昭和20年代まで、50余年にわたって活動を行った考古学者であり、各地の遺跡・史跡の調査に従事した人物でもあるが、これまでは殆ど研究対象として扱われて来ておらず(1)、どのような人物であるかはあまり知られるに至っていない。そこで、まずその経歴の整理を行った上で(2)、柴田資料の全体像を概観する。

明治10(1877)年7月18日、愛知県春日井郡大曾根村(現、名古屋市東区)の瑞忍寺住職である柴田恵明の三男として生まれた柴田常恵は、同30(1897)年に単身上京し、真宗東京中学校高等科を経て、同32(1899)年、私立郁文館内の史学館で歴史学を学ぶ。同34(1901)年、台湾総督府学校講師となるが、翌35(1902)年に帰京して東京帝国大学雇となる。同39(1906)年、同大学人類学教室助手となるも、史蹟名勝天然紀念物保存法が施行された大正9(1920)年には東京大学を辞して史蹟名勝天然紀念物調査会の考査員となった。ここで文化財保護行政との関わりが始まる。それと同時に、内務省地理課の嘱託となり、昭和2(1927)年には事務の移管に伴って文部省の嘱託となる。また、この間、大正10(1921)年には東京帝国大学文学部標本調査嘱託を兼務した。その後は、昭和7(1932)年から慶応義塾大学において講師として教鞭をとり、同11(1936)年から重要美術品等調査会委員、帝室林野局嘱託を務める。戦後は、同25(1950)年に文化財専門審議会委員となるが、その4年後の昭和29(1954)年12月1日、脳溢血のため77歳で没した。

このように、柴田は政府における数少ない考古学の専門家として全国各地の遺跡や文化財等を調査した人物であり、考古学や文化財関連分野等を研究する上で非常に重要な人物であることがわかる。また、研究分野の中心は考古学であるがその学問領域は広く、縄文・弥生・古墳の各時代の考古学や仏教考古学から郷土史・歴史学一般に及んでおり、『石器時代の住居址』や『中尊寺大鑑』をはじめとする、多岐にわたる著作をもっている(3)。このことから、柴田は文化財行政に深く関わった人物であると同時に、考古学だけでなく仏教史や郷土史等にも造詣の深い人物でもあったことがうかがえる。

現在、國學院大學には、柴田が遺した写真・フィールドノート・拓本・自筆原稿類・乾板等の資料が所蔵されている。その詳細な入手の経緯については、必ずしも全体が明らかになってはいないが、柴田を師と仰ぎ自らを「外弟子」(4)と称する大場磐雄教授(当時)の手によって柴田の死後になされたものである(5)。収蔵された後には整理作業が行われ(6)、その際に作成された、大場の手による目録の草稿等が遺っている。この目録によれば、それぞれの資料の数量は、写真が5817枚、フィールドノートが83冊、拓本が5837枚、自筆原稿類が108冊(7)、乾板が177枚である(8)。

柴田常恵は当該分野の研究史において注目すべき人物であり、その柴田が遺した資料は十分に研究対象となりうるものである。そこで、この貴重な資料の劣化を防ぎ再生・保存するに留めず、活用することによって広く研究の進展に資するべきとの考えから、これらの資料の中の写真資料についての目録をここに刊行した次第である。

この資料目録は、43冊のアルバムに収められている写真資料(9)を収録したものであり、資料の分類・配列は原則としてもとのアルバムのままとなっている。以下にアルバムの構成を示す(10)。

北海道・福島	京都（一）
青森・新潟・石川・福井・富山	京都（二）
山形・秋田・宮城	愛媛・香川
岩手（中尊寺）	島根・鳥取・岡山・広島
岩手・栃木	広島・山口・福岡
群馬	福岡
茨城	福岡・大分・佐賀・長崎・鹿児島
千葉	熊本・宮崎・鹿児島
埼玉（一）	朝鮮・南洋パラオ
埼玉（二）	中国（一）
東京	中国（二）
神奈川（一）	雑（一）
神奈川（二）	雑（二）
静岡	雑（三）
山梨・静岡	雑（四）
長野・山梨・岐阜	雑（五）
愛知（一）	雑（六）
愛知（二）	補遺（北海道～茨城）
愛知（三）	補遺（埼玉～愛知）
滋賀	補遺（岐阜～雑）
奈良	不明
奈良・大阪・兵庫・三重・和歌山	

このアルバムは、県を中心として分類されているが、1つの県が複数のアルバムにわたっているものや、1冊のアルバムに複数の県が収められているものが多い。また、県別の分類に含まれなかったものについては、「雑」・「補遺」・「不明」に収められている（11）。

アルバムに貼付された写真には、柴田の手による撮影のものと、第三者から譲り受けたと思われるものとの混在がみられる。被写体については、考古遺物や遺跡、仏像、寺院建築が大部分を占めており、それ以外のものは僅かである。必ずしも書式が統一されているわけではないが、写真の多くには、裏面等に撮影場所、撮影日時、対象物の種類・名称・由来等が記載されている（12）。

県別枚数では、アルバム3冊にわたっている愛知県が最も多く、合計514枚である。一つの場所を対象とするもので、最も枚数が多くまとまって存在しているのが、独立して一冊のアルバムにもなっている中尊寺であり、その数は119枚である。柴田は、前出の『中尊寺大鑑』、大正14年の『中尊寺総鑑』と、2度にわたって中尊寺関係書籍の編纂を行っているが、これらの多くはこの中で使用されたものである。

近代日本の文化財行政に深く関わり、幅広い分野の学問を修めた柴田常恵の資料の中には、現在亡失した貴重なものも多くあり、その柴田資料を整理・分析することは、これまでの研究のさらなる発展に貢献するものであろう。この『柴田常恵写真資料目録』も、その一助となるものであると確信する。今後、本資料目録が利用されることによって資料の活用が進み、斯界に寄与できるならば幸いである。

## 註

- ( 1 ) 柴田を中心に扱っているものには、大場磐雄「学史上における柴田常恵の業績」(大場磐雄編『日本考古学選集 第12巻 柴田常恵集』1971年11月、築地書館)、山内利秋「画像資料と近代アカデミズム・文化財保護制度」(『日本写真学会誌』65 2、2002年4月)が見られるのみである。
- ( 2 ) 『職員録』等で確認することができる部分については確認したが、それが難しい部分については、大場前掲書や日本歴史学会編『日本史研究者事典』(平成11年6月、吉川弘文館)等の辞典類によった。
- ( 3 ) この点については大場前掲書に詳しい。
- ( 4 ) 大場前掲書。
- ( 5 ) 大場前掲書に、柴田の没後に拓本・ノート・遺稿を國學院大學が購入したとの記述がある。他のものについての詳細は明らかではないが、拓本については残されていた書類から昭和32年度中に購入したものであることが判明している。
- ( 6 ) 拓本の整理については篠崎四郎が中心となって行われたこと明らかになっているが、それ以外のものについては、関係したと思われる人物の多くがすでに故人となっていることもあり、その経緯や作業内容についても詳らかになっていない部分が多い。
- ( 7 ) 目録の表紙部分には106冊と記載されており、目録内で一致を見ていないが、ここでは個々のタイトルを挙げて算出している目録本文の数を使った。
- ( 8 ) これらの資料は40年間にわたって学内の各所に分散して保管され、その後も度々保管場所も変更されていることなどから、資料の全体像を把握することの困難さを招き、残念ながら必ずしも正確な数量を把握するに至っていない部分もある。
- ( 9 ) 写真の中には出版社に貸し出した後に所在不明となったもの、その後に返却されて別置されているものなどもあり、これらが正確な枚数の把握を妨げる一因ともなっている。
- ( 10 ) アルバムの配列については原則として当初からのものに従ったが、今回適宜並べ替えた部分もある。
- ( 11 ) アルバムへの整理についても明らかでない部分が多いが、現状を保存するという観点を重視し、現在の分類のまま目録化した。また、これと同形のアルバムで新聞の切抜きが貼付されたものがあと4冊存在するが、写真は含まれていないため、ここでは写真資料とは別個のものとした。
- ( 12 ) 記載者については、筆跡から柴田自身と思われるものが多いが、それ以外の人物、例えば柴田以外の人物が撮影したものである場合はその撮影者であると思われるもの等もある。

( 田 中 秀 典 )



# 凡 例

- ・本書は、國學院大學學術フロンティア構想「劣化画像の再生活用と資料化に関する基礎的研究」の成果の一部として刊行する、國學院大學所蔵「柴田常恵資料」中の写真資料に関する目録の第1集である。
- ・本書には柴田常恵写真資料のアルバム43冊のうち、北海道から愛知までの19冊分の資料2,733点の画像データと、資料に関する情報である属性データを収録した。
- ・原則として、資料の配列はアルバムのままとしたが、図面・書簡等については除外した。
- ・資料には、今回の整理にあたって新たに一貫した資料番号を付与した。
- ・画像データについては、資料のサイズや形状にかかわらず、長辺を基準にサイズを統一して掲載した。
- ・属性データについては、資料番号、資料に付されたメモ、資料のサイズ、備考の順に掲載した。
- ・資料に付されたメモは書かれた場所によって区別し、資料の裏以外に書かれたものについて、資料の表に書かれたものは以下に、台紙に書かれたものは以下に掲載した。
- ・誤記と思われるものも含めて、できうる限り原本の記載に忠実であるよう努めたが、それが困難な部分については適宜手を加えた。判読不能の文字については で、削除されている部分については――で示した。
- ・サイズについては、資料の形状や向きに関わらず、長辺(mm)×短辺(mm)で示した。
- ・備考欄には、資料がCyanotypeの写真、拓本、絵葉書である場合にはその旨を、資料に図や寸法の記載がある場合にはその旨を掲載した。その他、特記すべきと思われる事項については、適宜これを掲載した。

本書収録データにかかわる作業及び本書の編集作業は、杉山林継の指導のもと、以下の者が担当した。

青木良輔・宇野淳子・加藤里美・小鳥居由美・田中秀典・中村耕作・野口敦己・  
平澤加奈子・菱田京子・日原史絵・山内利秋・吉濱友加里